ダンスクロス エマニュエル・ユイン／奥野美和

空間のテクスチャーを引き寄せる繊細さ

コンテンポラリーダンスをとおしての日仏の交流――これがダンスクロスである。今年は、フランスからアンジュ振付センターの元ディレクター、エマニュエル・ユイン、日本から昨年、横浜ダンスコレクションEXで二つの賞を受賞した若手奥野美和によるソロ作品。世代や経験などの差を超えてこの一回だけの公演が充実していたのは、二人の個性が際立って反映されていたからだ。

ユインの『Múa』は、最初から最後まで真っ暗闇のなかで進行する。ときたまわずかな光のなかにユインの体の一部が見え隠れする。場所を変えて、異なったポーズで、見えるか見えないかぐらいに皮膚が浮かび上がる。闇を震わすように鳴り響くのは、チェロの生演奏である。まるで音を見て、身体を聞くような不思議な感覚に襲われる。

休憩をはさんで奥野の『PHANTOMS in MANUFACTURE』。映像とサウンドと身体を三位一体でつかう方法論は、去年と変らない。しかし「見せる」という意思が前景化していた去年より、本作のほうが全体にコントロールが効いている。大きなスクリーンに投影される炎のクローズアップの映像に、吸い寄せられるように近づく奥野に、こちらも思わず引き込まれる。体の重心をゆるやかに移動させながら波打つように動く上半身は、ダンサーとしての奥野の魅力的な資質だ。音と映像が変わるのに従い、動きの質を変容させた構成力もひかる。二人の対照的な作品に共通していたのは、空間のテクスチャーを引き寄せる繊細な手つきである。

石井達朗 Tatsuro Ishii

エマニュエル・ユイン「Múa」©visual creation PLASTIC RAINS　左：奥野美和「PHANTOMS in MANUFACTURE」©Hiroyasu Daido

7月6日／横浜赤レンガ倉庫1号館3Fホール

「Múa」 構成・静止の形式・出演：エマニュエル・ユイン　チェロ：ゾエ・カルティエ　照明：ピエール・ジャコテコンブ
「PHANTOMS in MANUFACTURE」 構成・振付・出演：奥野美和　音楽：藤代洋平